

ていったならきつと我が国が益々盛んになるだろうと私は思っています。」

(安井校六年生 守谷健一)

「・・・私は、速記文字たるものはこれからは速記者のみならず、一般に必要なことを非常に強く感じた。私は今この日本の速記界の状態では到底世界を檜舞台として平和の戦いは出来ないであろう。私はそれによって一般の人にこの速記文字の有難みを知らしめたいと思う。」

その外、「・・・時間を経済することは一つには国の富をふやす元であります」「感じた事はむづかしくなくて小さい子供でもすぐおぼえやすく、早く書ける便利な字である」「日本を文明国にするのは、各学校で速記時間をこしらえて教えるのが、一番大切であると思う」「外国では五、六歳の子供が速記文字を知っていると言われた時、僕は、なんとなくうらめしかった」「日本中の人が速記文字を学べば外国にとらない程文明国になる」

などその外に種々あるが、何れを見ても皆尊い知己の言のみである。これら愛すべき可憐なる印象記も、あるいは人によっては何等の値をも見出されないかも知れないけれども、しかし、少なくとも、わたくしに取っては決してそうではない。真に、心からの感激なくしてはとうてい読み得なかつたのである。